# ２０２４年３月３日（大斎節第３主日、Ｂ年）
# 牧師メッセージ

## 「イエスの言われる神殿とは御自分の体のことだったのである。」

（ヨハネによる福音書 2:13-22）

司祭ヨセフ太田信三

今週の福音はいわゆる「宮清め」の箇所です。主イエスは神殿に入ると、動物たちも両替商たちも蹴散らし、鳩を売る者たちには「わたしの父の家を商売の家としてはならない」と厳しく言いました。

この出来事を目撃した弟子たちは、「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」という聖書の言葉を思い出しました。これは詩編 69:10 にある言葉で、主イエスの十字架での死を指していると考えることができます。他方、ユダヤ人たちは腹を立てつつ、一体何の権威があってこのようなことをするのかと主イエスに迫り、「しるし」を求めます。主イエスはそれに対し、「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」と答えます。「イエスの言われる神殿とは、ご自分の体のことだったのである」とある通り、主イエスは自らの体を神殿と言ったのですが、人々はこれを聞いても何のことかさっぱり分かりません。「三日で建て直す」と訳された言葉は、「三日で起こす」と訳すことができる単語で、「復活」を表す言葉です。つまり主イエスの「しるし」とは、ご自身の受難と復活なのです。これによってこそ、もはや神殿で動物のささげものは不要となり、神殿は商売の家ではなく、主イエスによってもたらされる救いを祝う、まことの礼拝の場所へと変えられるからです。しかし、ユダヤ人たちは主イエスの言葉を理解することができません。そして、主イエスはといえば、この誤解を解くこともせず、むしろ誤解を背負ったまま、「しるし」の成就のために、十字架へと向かって歩んで行くのです。

主イエスと沢山の時間を共有した弟子たちですら、「イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉を信じた。」とある通り、主イエスが復活するまで、主イエスによる救いを理解できませんでした。神殿を教会と言い換えるなら、わたしたちも同様に、いくら教会に通い詰めたとしても、それだけではイエスの神殿でまことの礼拝をささげることはできません。主イエスの受難と復活という「しるし」を通らなければならないのです。主イエスは人々の悪意、罪により十字架上で殺されますが、三日後に復活します。これにより、主イエスこそが神の救いを告げる、まことの神殿としてわたしたちに示されたのです。そうであるからこそ、今日の使徒書でパウロが「主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」と祈ることができるのです。

わたしたちは教会を商売の家にしていないだろうか。大斎節、あらためて振り返りましょう。主イエスの受難と復活という「しるし」を通してこそ、わたしたちはパウロと同じように、まことの神殿としての主イエスにおいて、神へのまことの礼拝をささげることができます。神はわたしたちをいつでも、この主イエスの神殿へと招いています。